

戦争を知らない大人たち

松田妙子

深夜に地震があった時、とつきにラジオをつけて以来、時々ラジオの深夜放送を聴くようになりました。ある晩、マラソン走者の君原健二さんがゲスト出演され、東京オリンピックの話がされました。東京オリンピックの男子マラソンの話となると、円谷幸吉選手のことに触れないわけにはいきません。「王者」アベベに次いで二位を守っているながら、最後の最後にイギリスの選手に追い抜かれた、あの劇的な場面。その屈辱をバネに、次のオリンピックこそは、と期待されながら、ついに「もう走れません」という遺書を残して、自ら命を絶った円谷選手。

彼のことを思うと、涙がこぼれます。母が、東京オリンピックのファンファーレを、「何や、物哀しい音楽やなあ」と言っていたのも思い出されます。そうか、東京オリンピックって、物哀しいんだ……。日本中が熱狂したあの大会は、単なるスポーツの祭典ではなかった。昭和三十九年というあの時代、みんなが「国」を背負っていた……。日本の敗戦から十九年。それは、子どもだった私には、途方もなく長い歲月のように思えていました。でも、今ならわかります。今年は、阪神淡路大震災から十七年目。震災を体験した私たちにとっては、十七年経ってもいまだ生々しい記憶です。ならば、敗戦から十九年目のあの年に、日本人の多くが生々しい戦争の傷跡を引きずっていないか。たと、どうして言えましよう。

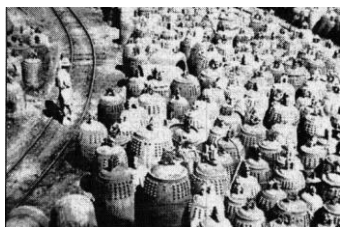
だからこそ、「東洋初」のオリンピックは、国家の威信を賭けた一大プロジェクトであり、円谷選手も日本という国家を背負われ、ついにその重圧に押しつぶされてしまったのでしよう。「国立競技場で、国民の目の前で負けたことが、彼には耐えられなかったのです」と君原さんは話されました。その円谷選手に、戦争に駆り出されて死んでいった若者たちの姿が重なり、改めて、あの戦争について考えさせら

れます。そして「あの戦争」について考えることは、「3・11以降の日本」について考えることと、重なってゆくのです

七十年近くも前の時代の雰囲気、今の社会の空気と酷似していることは、日本に住む多くの人々が感じているのでしよう。「疎開」「国難」など、当時と現在を結ぶキーワードは、多々あります。今私が実感しているのは、この厳冬期に張られる節電キャンペーンと、戦時下の耐乏生活との相似です。「記録的な寒さ」や豪雪の被害が各地で報じられる中、何かじつと耐えているような生活を続けざるを得ない私たちは、まるで「欲しがりません勝つまでは」の時代に生きているかのような気分にはさせられます。でも、人間同士の戦争ならば、いつかは勝敗が決まるけど、自然を相手の戦いには、果てはないのです。それを忘れかけていたのが、3・11以前の多くの人々の姿だったのでしよう。

そして今、いつ果てるとも知れぬ自然の猛威との戦いに、人々は必死で工夫を凝らしています。例えば、古い型の電化製品を、新しい省エネ型の製品に買い換えて節電しようという動き。しかし、まだ使える製品をどんどん廃棄して、次々と新しい製品を生産してそれに乗り換えるのが、果たしてどれだけエコになるのか、私は疑問に感じます。「経済の活性化」のためにそれが必要だというのなら、そんな社会自体が変だと思えます。きっと今の私たちも、後世の人間から見れば笑止千万なことに、あたふたしているのでしょうか。戦争中、兵器製造のための金属が不足しているとして、お寺の鐘まで「金属供出」されたことを笑う資格は、私たちにはありません。

私が生まれた時には戦争は終わっていたので、戦争なんて遙か大昔のことに感じていました。でも、私が生まれた年は、「原爆の子の像」のモデルとなった、佐々木禎子さんが亡くなった年なので



す。何だ、まだそんな時代だったのか……。

これは、五十年以上生きてきて、やっとわかった感覚です。

阪神淡路大震災を知らない今の子どもたちも、いつかは、今の私と同じような感慨にとらわれる日が来るのでしょうか。そして、東日本大震災を知らない、未来の子どもたちもまた……。いえ、今の危機的状况を考えると、現在及び未来の子どもたちが、無事に大人になれるという保証は、どこにもないのです。

私子ども頃の頃、「戦争を知らない子どもたち」という歌がはやりました。その「子どもたち」も、とうに中高年を迎えた今。寒い季節に亡くなる人は多いということ、他人事として聞いていた私も、年を取るということは、一步一步近づくと死の足音を聞くことなのだ、と実感しています。かつての「戦争を知らない子どもたち」も、そんなに年老いたのだと感じながら、「戦争を知らない大人たち」、でも「震災を知っている大人たち」の私たちに求められているのは何か。歴史に問われている気がするのです。

2012、2、12、2:30PM*

石巻のカーネーション

石巻のとても大変な農家さんの花を買ってもらえませんか？いつも東北震災支援をされている森本佳代子さんからの連絡があった。配達するとのこと待っていると、晩になって最後の場所とのこととお話をゆっくり聞かせてもらった。

石巻は津波被害のひどかった場所で、そのおうちは、家ごと、お父さん、4人兄弟の一番上のお兄さんが亡くなられた。お母さんは震災前に癌で余命3ヶ月と診断されていた。高台の畑、花を作っていたガラスハウスが無事だった。病院のお母さんに聞きながら20、18、11の息子たちは花を作り続けた。その間に行方不明だった父と兄の遺体が見つかった。もうすでにお骨になって、DNAの鑑定等で身元がわかったのだ。そうして暮れには、頑張っ生きてくれたお母さんが亡くなってしまった。その頃森本さんが兄

弟と知り合って、親戚もない兄弟の葬儀等の援助をされた。寒い地域では冬にはガラスハウスの灯油代がかかるので、みんな花を切って売ってしまうのだが、兄弟は知らずと暖房し続けたので、大変な支払い、お母さんの入院費の支払い、仮説へ移ってからの生活費、貯金も保険もどこかにあるのかもしれないが引き出せない。森本さんたちはとにかくお金を作るために花を切って関西に帰り森本さんがお金にする。畑も隣人に買ってもらい月々少しずつ払ってもらって生活費に当てることに。いろいろ段取りして帰る途中仲間から連絡、兄弟が自殺を図ったと……。すぐ飛んで帰り、抱きしめた。支えがいる。

そうして光円寺に来た石巻のカーネーション。赤く赤く黒いほど赤く、深く花びらが重なっている。ガラスハウスから切り出され、ぎゅっとしぼんでいるようだった。暖かくなれば立派に開くだろう。赤い、赤い、カーネーション。

森本さんは阪神淡路大震災で九死に一生を得て人生が変わってしまった。トラックの運転中にも授乳しようと停車した間に地震。目の前で阪神高速が倒れた。そのまま行っていたら自分たちも死んでいた。本当なら死んでいたはずなのに、ちよつとしたことで死なずに済んだ。いのちを助けた。目の前には亡くなつたのち。全てを援助に回して、依頼17年ずつと震災支援に全国を駆け回っている。東北への支援も4月には大型トラックに布団やストーブの支援物資を満載、実家で作っている花を3万本持って石巻へ行った。そのころは連日搜索された遺体が海から上がってくる毎日、火葬もできずビニールに包んで集団土葬だった。一年後に掘り返し火葬するのだという。あまりに亡くなった人が気の毒で、森本さんは傷んだ遺体を花できれいに拭いた。海からの遺体はなぜか何一つ身につけてはいないそう。ビニールの中を棺のように花でいっぱいにした。毎日毎日。……そんなこと思いもしなかった。亡くなった方に寄り添い、助かった人に寄り添い、その時にかげがえのないことを実行する。こんなことをする人がいたんだ。

森本さんはお花やひばや槇等「買う」(カンパへのお礼)ことで支援してくれる人を求めている。時には黒豆の枝豆やイチゴジャムなどもある。神戸で被災した人が作っておられるとのこと。

静かに語りたいと心から思う。急がず自転のリズムに乗り、波のリズムに乗って。永く続くこの星の足どりを感じながら。それでも、わたしは一人の人間として急がざるえなことも思う。急ぐ。この国、この世界から苦しみ、嘆き、悲しみが無くなることを望まなくてはいけないと思うのです。一刻と未来が蝕まれていく状況と、いつ何時に最悪の事態が牙をむくかもしれない現実が目の前に有る。一人の人間として、歩かなければいけない道が目の前にある。わたしは勇気を持ち、歩みたい。

わたしは東北のある農場で二間半×一間半の小屋を建てて暮らした事がある。電気、ガスも水道もなかった。つまり水洗のトイレも、流し台にガス台、風呂もないという事です。灯りはランプ、料理は薪ストーブ、買ひ物も殆どせず、幼稚園と連絡をとるために携帯電話を持ち車で充電していた。娘はわたしの玄米の弁当を持ち通学した。

冬、小屋は雪に埋もれた。発泡スチロールの断熱の小さな小屋は冷たい箱となる。朝、娘が寒くて泣いた。目を覚ますと同時に泣き始めた。そんな日は水を溜めている一升瓶が凍り割れた。何でもないような一つ一つが大変な作業だった。冬は畑から採れる物はなく、薪も秋までに用意したものを少して使っていく。細々と暮らした。

夜、小屋を暖めるより、床に早く就くようになつた。七時頃に布団に潜り込むのみ、子供と同じほど寝た。そんな中で分かったことがある、食べる量が少ないと、寒いという事だ。そしてそれは多くの作物の力、命の力を取り込み自己発電をしている物体がこの体なのだということだ。

断食をした人ならば分かると思います、決して食べるという方法が命を維持する唯一の方法ではないようです。森美智代さんの一三年間、青汁のみで過ごされている話は有名です。これは極端な例になつてしましますが、この事実には驚かされました。

「ロリ」は食糧食べまじょう。カロリーは何カロリー必要。」と、原子力発電は安全です。「は、わたしには同じように感じられてなりません。

食べるのが食糧過剰という話ではなく、基本的に人は食べるために労働をしている訳ですから、その部分からも新しい選択ができるという事です。思っている以上に可能性に満ちているという事です。必要以上のものを作り、消費していったのかもしれませんが。人から社会が離れて行ってしまうのかもしれませんが。

生命は自らエネルギーをつくる存在のようです。エネルギーは在るものなのです。この星も実はエネルギーに満ちていたと多くの人が解り始めています。つまりそれは争わなくても生きていくという事です。

とです。何処からか運んだり、分けたりしなくてもよいという事です。

実はフリーエネルギー発電も研究されていて、過去に何度と発表されてきているらしいのです。永久にエネルギーを生み出すシステムです。想像力が大切です。発電され続け、電気が常に有る状態です。誰かのものでなく、それぞれの場所にそれが有る状態です。夢の話ではなく、実演もされたという事です。人を含めた宇宙に人智が少しだけ近寄ったのかもしれませんが。

戦争。これはある意味、戦争です。

犠牲者は未来を生きる人です。勝ち、負けは無く、皆で新しい扉を開く道しかないのかもしれませんが。個人の利は結果的に争う構造の社会になつてのだから、行動とものもこのようになる思いを他の為に生き始めた時、新しい時代が始まるとおもいます。言葉で言うのは簡単ですが、実際にその中に生きるのは困難かもしれません。それでも、わたしは思います、目には見えませんが本心に少しずつ、気が付き始めています。変わり始めています。わたしにとっても本心に大きな大きな課題です。勇気を持ち、誠意を持ちこの道を頭を下げ歩いて行きたいと思つています。

もつと今までのとは違う価値を基準にして、人として生きる時代にさしかかっていると思わずにはいられません。新しい時代の扉が目の前にあります。